近世集落の広場

——堺のケース・スタディ (Ⅱ)——

渡 辺 達 三*

The Square in the Feudal Settlements of the Edo Period in the Case of the City Sakai (Report Ⅱ)

by Satomi Watanabe

5. 社寺境内地

5-1 序

堺にあっては社寺の境内地は市民の広場として最も重要でまた代表的な空間であった。社寺は神仏習合によりその一境内に神仏両性格が併存する例も多いが、南、北荘の氏神である三村大明神、天神社の境内がいずれも大(念仏)寺、常楽寺と堺の代表的な大きな寺院と結合している。

さて神社の数は寺院内の鎮守を含め 116 で、その主なものは三村大明神、天神社、戎社、神明社、宿院、高須稲荷の 6 社である。このうち戎社が寛文 4 年戎嶋出現とともに、高須稲荷が元和の町割後に、それぞれ祭祀されるようになったものである他は、すべて近世以前からのものである。寺院数は寛文 5 年の堺鑑によれば 186、延宝 9 年改の手鑑では 179、元禄 8 年改のそれでは 167 であり、幕末まで以降の各年鑑その他の文献が 167 を記している。これらの多くの寺院は元和災後の都市計画によりその場所を定められた。堺の社寺数はきわめて多く、それらの大部分は中世末の堺の港町としての経済的繁栄によりもたらされたものであったが、近世も中期以降になりその余蘊もなくなり、経済力の減少とともに多くの社寺を維持するのは困難をとまうことであったと推定され、儒者のうちにはつぎのように、寺院は堺の繁栄を蚕食するものであるとする指摘もあった。

叢爾タル堺津ノ地仏閣百六十七寺毎寺ニ現在アリ前任伴僧アリ沙弥アリ奴僕アリ内堅アリ把針ノ嬬婆掃除ノ傭夫臨時ノ客僧等大槩平均シテ十人己以上アルヘシ巨刹ニハ塔頭六七院借菴一兩軒アリ此等ハ人数モ亦衆多ナルヘシ十五人ツツノ積リニテ百六十七寺ニ千五百人其外市中住居ノ発心者山伏近村ヨリ入来ル托鉢僧悲田ノ乞子或ハ寺院ニ事ヲヨセテ勸化募縁ヲ興行ヲ自分渡世ノ営トスル輩彼比四五百人モアルヘシ総計三千余ノ素餐ノ従界津ハ千軒ノ民家ヲ日々ニ蚕食スル可ナレノ自然ト衰微ノ端トナル可計リ知ヘシ¹⁾

幕府はすでに寛文十年十月に社寺創建の禁令を出しているが、堺奉行もその旨を直ちに布達し、その後元禄 5 年 5 月等その旨をくり返し示達している²⁾。また社寺境内での神官・僧侶あるいは町人の比較的自由な諸行為のうちには封建秩序維持の上から好ましくないと映るような例も多く、僧侶などに対する仏事に関係の稀薄な諸活動に対する禁令などが出されることもあった。例えば寺院の天狗頼母子の禁止は元禄 12 年より出され、化政期には頻繁に出されている。

これらの社寺の配置の特徴は、イほぼ南北の郷の中心に各郷の氏神である三村大明神・大(念仏)寺、天神・常楽寺があり、ロ三村大明神の南に堺と因縁の深い摂津国住吉神社の宿院があり、ハ堺の市街の東および南側の辺縁部に社寺群が市街を囲繞し、ニ北および西側の辺縁部には社寺が散在し、ホ市街部分にイ、ロのほかの小社寺が散在する、配置パターンとしてとらえられる。

堺全体の中央広場としては住吉神社の宿院境内の存在も考えられるが、堺においてはその最大の自治的結合体として、南北の両郷が重要な意義を有し、それらの南北郷の中央広場としての三村大明神、天神境内が堺の実質的な中央広場であるといえる。各郷とその氏神との結合関係はきわめて緊密であったが、それはつぎの史料からもうかがうことができる。すなわち近世堺は大坂の繁栄と逆の相関をもってその経済的地位を失っていったが、北郷の衰微はとくにひどく、北郷は南郷に比しその相対的な衰微をみうるが、そのような両郷の相対的衰微、繁栄の暗明が空間的にわずかしき離れていない両郷の広場である天神、三村大明神境内の閑散、盛況としてはっきり投影されているのである。

神祠ハ南郷ニ三村アリ北郷ニ菅廟○天神アリ是兩荘ノ土神タリ境内ハ各六十歩四方ニテ少々ノ丹碧アッテ指テ目ヲ驚ス程ノ輪輿ニ非ス其内南郷ハ人民衆多ナル故ニ三村宮ハ常ニ繁昌ニテ傀儡師陰竿児ナト有テ往來絡繹タリ北郷ノ菅廟ハ祭礼ニハ群集スレ庄常ニハ寂寞タリ兩祠トモニ社僧アッテ記事ヲ掌ル○下略

すなわち南郷の三村境内は常に人々が集会合し盛況を呈しているのに対し、北郷の天神境内は祭礼時のみにぎわい、平時は閑散としているというのであるが、ここに郷

* 大阪芸術大学環境計画学科

とその広場の結合関係の大きさをみることができる。

さらに例えば筋、町等の郷以下の地縁的・自治的結合あるいは職業的仲間・座等と特別な関係をもつ市街地内の小社寺の存在(ホに属する)を推定することができる。

ハの市街辺縁部にある社寺は地域の結合、職業的結合の核としての関係からは相対的により自由な市民の宗教上の、あるいは慰楽の対象としての性格がより強かったと考えられる。以下社寺(境内地)の広場的な諸機能の

うちその重要ないくつかについてみてみたい。

1) 全堺詳志附録各門総論

2) 例えば「石野筑前守様被仰出候二十八ヶ条 明和九年十月」に、町屋買建立新寺之事 右新規之神支仏事并寄怪異祝堅令停止若新規之神事仏事いたし候ものあらは可為曲事端々町家買口類於在之者如先規丁役無懈怠可相勤とある

天神常楽寺境内図(「和泉名所図会」より)

5-2 寄合集会所

社寺の境内地が集会寄会所として使用される例はかなり一般的であったと考えられるが、文献的にもそのような例をいくつかみることができる。まず堺全体の集会寄合所は三村大明神の拝殿あるいは大寺の食堂において持たれたことを「十人ヲ会合衆ト云三村宮ノ拝殿ヲ会所トス後ハ今ノ大寺食堂ヲ会所トス」¹⁾より知りうる。

つぎに南北両郷の惣会所についてみる。南北4辻時代においては総年寄が執務する南端郷、北端郷の惣会所はそれぞれ少林寺町十間筋の東側角(同町西二丁)、蔵屋敷町の西側北角(櫛屋町東二丁)にあったが、北本郷惣会所は天神常楽寺境内の東南隅連歌所の東手にあり、南本郷惣会所は三村宮大寺境内にあったことが推定されるという²⁾。南北2郷時代になってからはつぎのように南郷惣会所は大寺境内西門内北側にあり、北郷惣会所は以前の本郷、端郷両惣会所が使用された³⁾。元禄8年改堺手鑑にはつぎのようにみえている。

会所数并南北惣会所

合百七拾老軒 内

五十九軒 南本郷 四拾五軒 北本郷
貳拾五軒 南橋郷 四拾貳軒 北橋郷
南惣会所 大寺ノ内 北惣会所 天神ノ内

のち寛政末期には蔵屋敷町の北郷惣会所は糸会所となり⁴⁾、大寺の南郷惣会所に市之町大浜筋大小路南入西側(市之町西二丁)に、天神の北郷惣会所は櫛尾町大造花田口北入西側にそれぞれ移転したが⁵⁾、それまでは大寺、天神の境内が惣会所として機能していたことを知りうる。

各町にはほぼ町数に相当する町会所がみられるので、社寺境内地のうちに設けられたものも多数あったと考えられる。また職業仲間の会所はさきにみた会所以外に社寺境内地においても持たれていたと推定される。元禄8年改堺年鑑の諸工商諸師のうち、大工中においてはつぎのように記載されている。

一大工数貳百五人 年寄貳人 惣代四人 組頭四人
内 五拾九人 虚空蔵寺組 七拾人 荒神堂組
四拾人 骨尾町組 三拾六人 山屋敷組

この荒神堂組は中世の堺の項でみたように荒神堂を寄合

所としてもつ大工の仲間であると考えられ、虚空蔵寺組も虚空蔵寺を寄合所としていた可能性が高い。

その他各種の自治的集団が定期的あるいは臨時に、また偶発的に成立した集団が慰楽・集会合の場として、社寺境内を利用する例も多々みられたものと推定される。

- 1) 全堺詳志 上巻
- 2) 堺市史
- 3) 各堺手鑑
- 4) 寛政拾老年改堺町絵図
- 5) 文化6年改以降・堺町絵図

5-3 宗教的行事の場

社寺は元来宗教の専用空間であるが、時代が下るにつれ、しだいにその地域・社会的な性格を強くしている。その地理的立地についてみても、深・高山からより集落の中心へと近づいている。近世の社寺のうちには地域的な性格を強く有しそれが宗教的なそれに優越するようにみえるような例も少くない。たとえば、三村大明神、天神社等の鎮守社は、その宗教的教義の性格よりも、それが南、北郷の地域鎮守たるそれがより重要な意義を有するようになる。それゆえ宗教的行事も当然のことながら地域の社会生活の必要を充足するコアの一環としての機能が期待され、社寺側も積極的にそれに応える例も多い。そのような例は、たとえば、地域が危機に直面したときの両者の対応関係においてもみることができる。堺においては悪疫流行に際して町内あるいは組合が申し合わせ、その退散の祈とうのための千度詣りを行ったり、あるいは雛形をつくってそれを神仏にそえ湊口に流すなどの習慣があったが、それらの多くは、大寺、天神、宿院、神明の4社が選ばれ、社寺側はこれを指導している。

さて他の諸都市・農村と同様、堺にあっては庶民の年中行事の主なもの、ほとんど、社寺を媒介として、それを舞台に行われるといってよく、社寺ないしはその境内地の市民の公共生活、あるいは宗教、慰楽等の私生活に果たす役割の大きさを知ることができる。神仏信仰の普及は泰平の時代の到来・継続につれて、いよいよはなやかに盛況を呈していったが、「界津神社仏寺年中祭会部」¹⁾では近世中期堺の祭典・仏会のおびただしい数を見ることができる。そのうち最も規模が大きく、しかも郷の背景をもってなされるものに、大寺および常楽寺の両所の莊嚴の頭といわれる行事がある。町人氏子のうち財産富み家系正しく凶事なき夫婦揃いの者を選び神籤にて50名を定め報礼させる行事であり町の繁栄を感謝し祈願するものであった²⁾。

各神事・仏事も盛況を呈し、戎嶋の例年の施餓鬼修行の文政8年の例では、参詣者多く、橋の荷重にたえなかったのであろうか。つぎのように橋が落ち多数の死者をだしている。

一同文政8年7月廿三日 堺戎嶋に而例年之施餓鬼修

行=付参詣之男女橋之上=而見物之処右之橋葉此(橋は橋抗なし)十五人即死外溺れし者追々死去多きよし³⁾

また慰楽を兼ねた流行神仏の巡拝も盛んであった。観世音札所は天保15年9月の番付に、元禄15年6月のものである旨を記し、1番天神常楽寺の十一面観音より始まり、33番宗泉寺如意輪石仏に至り、八所観音は1番光明院千手観音より7番吾宝寺準胝観音を数え、その巡拝路が示されている⁴⁾。これは元禄以前の創始と解されているが、近世中期以降にその盛行をみるようになった。また開帳・出開帳にもぎわった。出開帳場所は、中央広場である大寺境内、天神境内等がよく用いられた。例えば宝暦11年3月には大寺にて和州岡寺本寺、明和3年3月には長谷寺にて那瀬寺観音、同5年3月には大寺にて住吉奥ノ院、同6年天神にて粉河寺の開帳等がみえ⁵⁾、化政期以降では、文化元年3月大寺での家原文殊、同10年5月の美濃谷汲観世音、同14年2月には壺阪観世音、天保5年7月には、ふき阿弥陀、同10年3月信貴山毘沙門同11年3月大和長谷寺観世音、弘化2年4月草部不動、同4年5月大和国原山役行者等、いずれも同所に信者を集め⁶⁾、また文化頃大寺にて榎尾寺観音、天神にては大和菅原等の開帳があり⁷⁾、天保7年5月には「天神境内にて妙法山開帳に付ねり供養有之也右誠に大当り御はやり也塩穴寺開帳は不はやりに御座候東福寺其他みな有之信貴法隆寺有之候⁸⁾」とある。

さて奉行所では社寺役を通じて社寺の取締りにあたらせているが、つぎより大寺三村大明神の祭礼に対する警固の一端をうかがい知ることができる。

寺社役覚書 寺社役年中行事之事 七月晦日
一 今明日甲斐山口町大寺念仏寺三村大明神祭礼今日神輿渡御有之=付刻限之儀者為如来候ハ、上役兩人下役兩人同所寺中江向罷越年預寺自行列書差出=付請取之神輿上ヶ境内出與夫々警固出役之面々罷越候ハ、跡自渡御道筋罷越芦原町浜=休憩所小屋取繕有之=付右小屋=而休息神輿同町浜旅所江居神子罷越神樂上ヶ次=社僧神事相勤=候旨為和來候ハ、旅所前江罷越致見分相済候ハ、元小屋江罷越神輿昇上候ハ、如最初跡自念仏寺迄罷越連歌所=而休息神輿拜殿江納候旨警固出役之届來候ハ、引取候事

但着用上役者継上下役者羽織袴大寺社用達垣外四人兩具持人足老人召連⁹⁾

またつぎのように法事等の小屋掛などの願い出も受けつけている。

一 法事=付堂内狭当分小屋掛さしかけ仕度ス者夜修行等願出候ハ、承届其役可申上哉〔朱書此〕兩様共願出候ハ、被御聞届法事相済候ハ、早速取払候中付候夜修行之儀者年限相極願出候ハ、是又被成御聞届候先例

＝御座候〕¹⁰⁾

また平時、社寺を巡見、諸雑務を行わせている。

一寺社境内并泉州貝塚久米多寺嶺尾山神鳳寺寺内等ニ
從者取籠手ニ余候由甲來候節者寺社方与力同心加人
同心甲付罷越其仕儀ニ寄取計置其段可申上哉¹¹⁾

一寺社境内并直御支配所泉州貝塚久米多寺嶺尾山神鳳
寺内御朱印寺領泉州踞尾村変死捨物欠落捨子手負行
倒死之もの断來候節者常例之通取計置其段可申上哉
〔朱書此儀一寺之保持持等変死者私実下役召連見改其
外者下役同心候使被差遣候上怪敷儀も不相聞候ハ、
片付被仰付候捨物之儀者三日見合申付置主無之候ハ、
欠所ニ取上欠落断者掛り合有之もの候ハ、尋等甲
付界内寺院境内借屋之もの名前人者三十日見合弥不
立帰候ハ、残置候諸色欠所ニ申付立帰断出先々悪
事無之節者欠落帳面済遣其外者常例之通被仰付候捨
子者憐愍を加養育いたし置貫人有之者可断出旨申渡
貫人有之者縫成者に候ハ、勝手次第可遣入念証文
取置三十年之内重病異変之儀も有之者可断出旨申渡
相果候ハ、下役候使被遣候日頃見馴非人者方角之墓
所江片遣候様被仰付候仕來ニ御座候〕¹²⁾

以上は社寺境内地における神・仏事を中心にみたが、それはそれ自体、共同体的性格を濃厚にしているといえる。つぎには宗教性に媒介されながらもその慰楽的な性格のより強い境内地の広場の利用についてみてみたい。

1)～2) 全堺詳志巻之下 3) 摂陽奇観巻五十

4) 堺市史 5) 摂陽奇観 6) 胡講組合帳明和二年以降 7) 街談文々集 8) 指吸重喜日記天保八年 9)～12) 寺社役覚書

5-4 レクリエーションな利用の場

堺の自治、共同生活の進展は市民の慰楽欲求を誘引し実現させる。都市内慰楽の場は、堺にあって、また、適切な空間が他に求めがたい等の理由、またそれ以上に、市民の社寺への信頼と親愛感のゆえに、社寺境内地が求められる場合が多かった。社寺境内地では芝居、角力、浄瑠璃、説教、物真似等で連日にぎわった。その代表的な例は両郷の氏神である大寺、天神であり、それに宿院、旭蓮社等がつづいた。和泉各所図会には大寺のにぎわいが次のように記されている。

当寺の封境方宅町許示して衆徒大坊西座ニ坊あり常ニ詣人断間なく神の御前賑しく賈人の小店櫓をならべ軍書嘶、口拍子、操芝居、歌舞伎狂言の三絃太鼓の音ゆゆしく当津に於て繁花の第一なり¹⁾

社寺はそれ自体、芝居等の興行を主催することもあり、その境内地の慰楽の利用を積極的に容認していったと考えられる。また奉行所もそのような利用に対して比較的

寛容であったが、次はそれを推測させる一の史料である。

一神明於舞台神事能又者寄進能神湯神楽其外右境内并宿院大寺天神北稻荷戎嶋戎社右六ヶ所ニ而神道講釈或者心学軍書講釈昔嘶大弓揚弓相撲興行等之儀且其外之寺社も水茶や計之儀願出候ハ、承届其段可申上哉〔朱書此儀神明神支能興行之節者私共下役召連罷越猶非常手当候使番与力同心出役仕寄進能興行之節者寺社方盜賊方下役老人宛立会御免相撲願出候節者寺社方地方下役老人宛立会被差遣候都而下役共寺社廻り之節及見如何之儀も心付候儀申聞候節者申上候先例ニ御座候〕

一宿院境内水茶屋小商等暑氣之時分昼之内人出無之夜五時迄差置度旨支配人共願出候ハ、承届其段可申上哉〔朱書此儀例年被成御聞届火之元入念凶事無之様可致旨申渡候先例ニ御座候〕²⁾

これより神明社での神事能、寄進能、神湯神楽、また神明社、宿院、大寺天神、北稻荷、戎嶋戎社の6ヶ所における神道講釈、心学、軍事講釈、昔嘶、大弓、揚弓³⁾、相撲等の興行について、あるいはその他の社寺についても水茶屋出店について、願い出ることによって許可されることができると推測することができる。

近世の慰楽行為のうちで重要な一つに芝居があげられるが⁴⁾、社寺境内地に芝居、劇場が設けられる例も多い。堺においても例外ではなく、大寺、宿院等でしばしば芝居が興行された。すでに寛文10年8月に鑑町に劇場が設けられ⁵⁾、その規模は東西11間半、南北38間、内舞台3間四方、橋掛り長さ5間、下屋1間、楽屋南北4間、東西9間半、物見場南北10間、東西8間、杖敷23軒、各1門口宛であった⁶⁾。その後つぎのように安永9年10月に芝居大破し休櫓が願い出され、大寺がそれを借り受け、同境内での子供芝居の興行許可が実現されている。

鑑町芝居

一東西拾間半余 南北三拾間余 外三間四尺余預地有但寛文十庚戌年八月出来

安永九庚子年十月佐野備後守奉行之節芝居大破ニ付休櫓相願候ニ付右櫓借請大寺於社内子供芝居興行之儀右芝居主之内住吉屋六兵衛願出ニ付御城代牧野越中守殿江相同同年十一月廿一日願之通申付ル⁷⁾

また後述する戎嶋の芝居も寛政12年に大破および宿院これを借り受け同境内においての子供芝居を願い出、文化4年に許可されている。大寺、宿院の芝居は当初は子供芝居の名目のもとに許可されたものであり、その規模は小さかったが、文化以降には大坂下りの大一座を招くような規模に発展している。例えば、文政3年には尾上多見蔵、三代尾上菊五郎が大寺に、同8年には三代中村歌右衛門、同12年7代目団十郎の芝居が宿院か大寺のいずれかで興行されている⁸⁾。しかし他方で、大寺の芝居

小屋の位置が会所に接近し、芝居のにぎわいのために不都合な点があり、甲斐山口町より種々の苦情を受け、町中に詫書をいれている例もみられる。市民に人気の高い芝居もきびしい条件の下で行なわれたのである。

大寺境内芝居地面借用証文 一札之事

一大寺御境内地面借り受御座候私共名前芝居小屋先年有所差支御座候付当時有之場所引直之砌町内会所＝隣役宅之儀＝付御不承知之段被入念如何之趣被仰下候へ共何分場所も無之見越等之義無之様仕可申尚又御町内差支無之様可仕段一向御願申入候処御承知＝下全郷丁内厚御了簡故自大慶仕罷在候処其後忘却仕御丁内江対し不敵之義間々有之此度興行仕候付御年領江御断＝下候付敵敷被申付誤入申候追々御丁内へ御叱申入候処是迄不行届不調法申分無之次第此上如何躰之被仰立候共一切申開も無之候何分御縫り申上御憐愍を以旧惡之向々御了簡被成下候段千万大慶仕候然ル上ハ以来急度相改左之通

一芝居興行中喧嘩口論等無之様御丁内ハ近辺之義＝付御役介相掛候義一切仕間敷候万一無抛義共前条之義候ハ、諸費等一切私共相弁可申事

一芝居興行仕候においてハ御年預御願相済候上ハ御丁内御年寄役人中勿論御町衆江其砌相断可申候事

一顔見世興行等之節御丁内提灯等燈候義ハ其節御断申上御差図次第違背仕間敷候勿論火之元別而入念可申候事

一芝居興行＝付芝居主名代不及申表方雇之もの共＝至迄御丁内＝対しかたきケ間敷義ハ勿論不敬之義無之様急度申付精々無論申付ヘク候万一行届之義候ハ、如何様ニモ取斗可申事

右之通兼而芝居掛之もの共申付置候後年＝至迄忘却仕間敷候其外万端心付兼略之義無之様可仕候万一相振候義も候ハ、其節ハ御一山江如何躰被仰立候共一言申分なく御差図次第可仕候尤名代等相替候義候ハ、右之趣申伝其節早速一札相成可申為後日証文之一札仍如件

文化八年未三月	芝居主	辰野屋善兵衛
		代綿屋新兵衛郎
	名代	大和屋藤兵衛郎
	表方惣代	大和屋忠兵衛郎

甲斐山口町 河内屋作左衛門殿

御 町 中

右之通承知致罷在候万一掛之もの共心得違之義在之候ハ、当山自急度可申付候尚又芝居主名代等相替義有之一札相改不申候ハ、此方自急度申付早速為相改可申候為其慮印仍如件

大寺役僧 秀 山御

大寺、宿院の芝居はいくつかの障害を克服しつつ次第に

活況を呈していったが、天保8年3月、宿院等の芝居は、新地繁栄策の一環として竜神町に、さらに同14年4月、横町の北芝居に移転され、また、たまたまその頃社寺境内地での芝居取締令が出され、大寺の芝居もまた竜神町の南芝居に移転された¹⁰⁾。しかし以後も小規模な芝居は設置された可能性が大きい。それは例えば三村宮から明治6年堺県令税所薦にあてた口上覚に、「一当社芝居小家右別而鹿末之造作＝而社内見苦敷御座候付瓦葺取計候様甲達度御座候¹¹⁾とあるのもうかがえる。

つぎに境内地の市も慰楽上重要である。天神の境内図には常設の市店がみえ、また三村大明神においても日店がつぎのように本社近辺、小門左右などにおかれていた。

一日店 但本社近辺併小門左右

右社殿廻取乱し不潔之至御座候付取除申度尤夜分人銘々自宅へ帰宿いたし候者共御座候¹²⁾

さらに境内地における名木、名花、名石などの鑑賞も慰楽上重要であった。社寺の巡拝の動機づけにおいて宗教上の御利益と同様の要因となつたと考えられる。

1) 和泉名所図会 2) 寺社役覚書 3) 揚弓は元禄4年5月に塩浜、宿院、戎嶋、稲荷の4ヶ所においてのみ許可された(摂泉鑑小鑑) 4) 右野筑前守様被仰出候二十八ヶ条明治九年十月には

一見世物之亘 右有来如法奉行所江書付持参可任差図喧嘩口論無之様急度可入念且奉行所之役人と弓罷越見物之価を茂不出其上桮威ケ間敷申出族在之者其者を押置早速注進可申来令用捨後日＝相和れ候ハ、可為曲事とある

5) ～6) 元禄十七年改界手鑑 7) 文化十年改界手鑑 8) 三都役者、代々接木延猿狂句集 9) 大寺境内僧内一札文化八年 10) 堺市史 11) ～12) 開口神社文書

5-5 防災・避難の場その他

社寺の軍事上の効果についてはいくつかの考察がなされているが、社寺は、さらに稠密な市街にあって、延焼防止等の防災上の存在効果さらに災時の避難場等、種々の機能をになっていた。

嘉永7年の大地震の際には、宿院、大寺、天神、神明等の社寺境内地が避難場所として利用され、災後には産土神である神明、三村、天神に幣を捧げ神恩を謝し、後世の鎮護を祈願している例をみることができる。

嘉永七寅のとし六月十四日地震あらあらしくまたも十一月四日朝五日夕につよくより動き五日はゆふゆふその沖のかたおとろおとろしくなりふためき暮なんころ俄に津波たちて川すしへけハしく込ハリ引もまたはけしく川通りに繫し船ともハ碇綱きれ棹さすちからたらず矢庭に走り入りそこよこへつきあてゝ橋ハって崩

落ち船はゆれ或はつよく損して見るおそろしさいはん
かたなし地志ん津浪に家潰れぬりこめかたむきたるは
さはなれて里人へ神社の広庭ニ集りてさけ居たるかれ
これがために一人も怪我はし志たる人のなきそいとい
とめてたかりかる……堺の人のつゝかもなきありかた
さに産神神明宮三村宮天満宮にそのよこひの幣を捧
げ後の世までも患のなきを祈りて賜りしをして¹⁾

嘉永七甲寅歳

市中衆大さわき候茶船行門有宿院大寺天神神明行(太)
内表へなや多亭を里候夜可や津里候……今日夜より内
で禱る人有浜宿院ねる人有之候²⁾

天明7年6月の米価高騰の際には、堺の富豪の合議に
よる救米の供出が実現したが、市民は、大寺、天神等に
五穀豊饒の千度詣りの祈願を行った(神明天神大寺宿院
江千度参り呼豊年願夜毎灯燈昇組々大勢出ル³⁾) が、天
保の飢饉においては、天神境内での白米施行、南郷の発
光院、北郷の超願寺における粥の施行をみうる。

飢人施主之為祈禱由来書

兩三年以来米穀追々高値之上天保四巳秋自別而高価ニ
相成市中末々之者弥以困窮差迫冬分ニ至候而ハ下々其
日を可送送方便も無之既ニ飢饉ニ可及ものも可有哉之
趣ニ付当境酒造家中自於天神境内市中困窮人江白米施
行在之猶又右之内を分け南郷者新在家寺町発光院北郷
者当超願寺右兩寺ニおゐて粥焚則世話人共南北西寺江
相別て去巳十一月十四日上里粥施し相始候

天保五甲午年二月⁴⁾

さらにつぎのように疫病の流行に際しては病除安全祈
願の千度詣りが行なわれた。

乍恐口上 急病相発候付丁内安全之た免今廿一日自明
後廿三日迄夜分斗大寺天神宿院右三丁所へ丁内之者共
御千度ニ罷出申渡奉存候間乍恐此段御届ヶ奉申上候

戌○文久五年 八月廿一日 本在家丁世話方

美濃屋善兵衛^⑤

町御目附様^⑥

同様の趣旨の千度詣りの、町内、町連合、職業仲間等
による願届が文久2年の7～8月間につぎのように頻繁に
みえている^⑥。

7月27日 芦原町

8月12日 甲斐町浜・大町浜両町

17日 神明山口町

20日 桜町

21日 本在家町、綾口町

22日 市農人町

23日 北中之町、錦之町、湯屋山口町、南糸屋町
両替町

26日 中筋村中関折町、宿院町今店町塩奥仲間

27日 甲斐町、錦之町中浜

閏8月1日 中魚屋町、九間・神明・柳農人町、大甲浜
南北酒造屋世話方

2日 南半町

3日 北馬場町

5日 九間町

6日 南鏡屋町

9日 中筋村尾町

11日 米問屋仲間

18日 南中之町上浜

19日 米問屋仲間

20日 米買次・仲買両仲間

さらに社寺境内地のうちには、非人等には、仮のあるい
はかなり永続性をもった居住の場を提供するものがあつ
た。例えば文化10年の堺手鑑には、「南北寺院境内借屋
家数合貳拾七軒比竈数貳拾八」とみえている。

- 1) 嘉永七年大地震記録 2) 大浜地震碑々文嘉永
七年 3) 考園歴史 4) 飢人施主之為祈禱由来
書天保五年 5) ～6) 町目附御用書類綴

(注) 本報は前号の5. 社寺境内地(略報)に相当

Summary

These are studies on the *Squares* in the case
of the city *Sakai* in order to inquire into how
the *Squares* exist and function in the Feudal
Settlements of the *Edo Period*.

In this report (II), intending to inquire into
how the precincts of the shrines and temples
regarded as one of the most important *Square*
in Japan are made the best of as such spaces,
the author studies that they function as meeting
places, shelters and recreational places such as
wrestling tournament, theatre-going, tale-listening
shopping etc.